



上／洗浄・消毒される母豚
左／常に清潔に保たれている豚舎内

“未来”と名づけられた同社の製品



「肉を食べることを、命を『いただく』と言いますが、同じ『いただく』でも、薬を使用したものより、自然に元気に育ったもののほうが、人間の体にもいいに違いないと思っただんです」（正治社長）

通常の養豚では、免疫を全く持たずに生まれてくる子豚は事故率が高く、その後の成長過程でも生産性・効率性を高めるためには薬が必要不可欠とされていた。そのため飼料そのものにも菌を抑えるための薬が混入されており、出荷前の二か月の無投薬期間によって薬はほとんど残らないものの、完全無投薬は不可能とされていたのだ。「百頭の豚を試験的に無投薬で育てたのですが、多くが無事に出荷できたので、『いける』と思いました」。だが、薬を使用していた豚が豚舎からいなくなった途端に変化が。豚の事故率が上がり、成長にばらつきが出始めたのだ。薬の代わりにハーブを混ぜた餌の配合、細かく仕切られた豚舎の温度や湿度、飼育期間などを試行錯誤しながら、一つひとつを最適化する作業を続けた。「もう限界だ」。三年目の決算のとき、

決算書を見ながら正治社長は、妻・美津子さんと検診を担当していた管理獣医師の二人にそう告げた。正治さんの苦悩を知るだけに、美津子さんは「もう少しがんばってみよう」と涙した。そのときに決断はできなかったものの、他業種の無農薬栽培を見学する中で確信を深めた。そして四年目、ついに複合的な努力が結実し、無投薬豚の生産が安定、軌道に乗ったのである。

志の輪が広がる

「無投薬の安心・安全な豚肉を食べてもらいたい」という志を持って、養豚を続けてきた正治社長。「自然と同じ環境で育った無投薬の豚の良さを伝えしながら、ほんとうに必要としてくださるかたにお届けしたい」（美津子さん）と、ホームページを開設して直販も始めた。「まだまだ経営としては苦しいんです」と正治社長は販路の拡大をめざしているが、その志の輪は少しずつ少しずつ広がっている。



左／会長の平治さん（左）と正治社長と妻の美津子さん
右／元気に育つ子豚